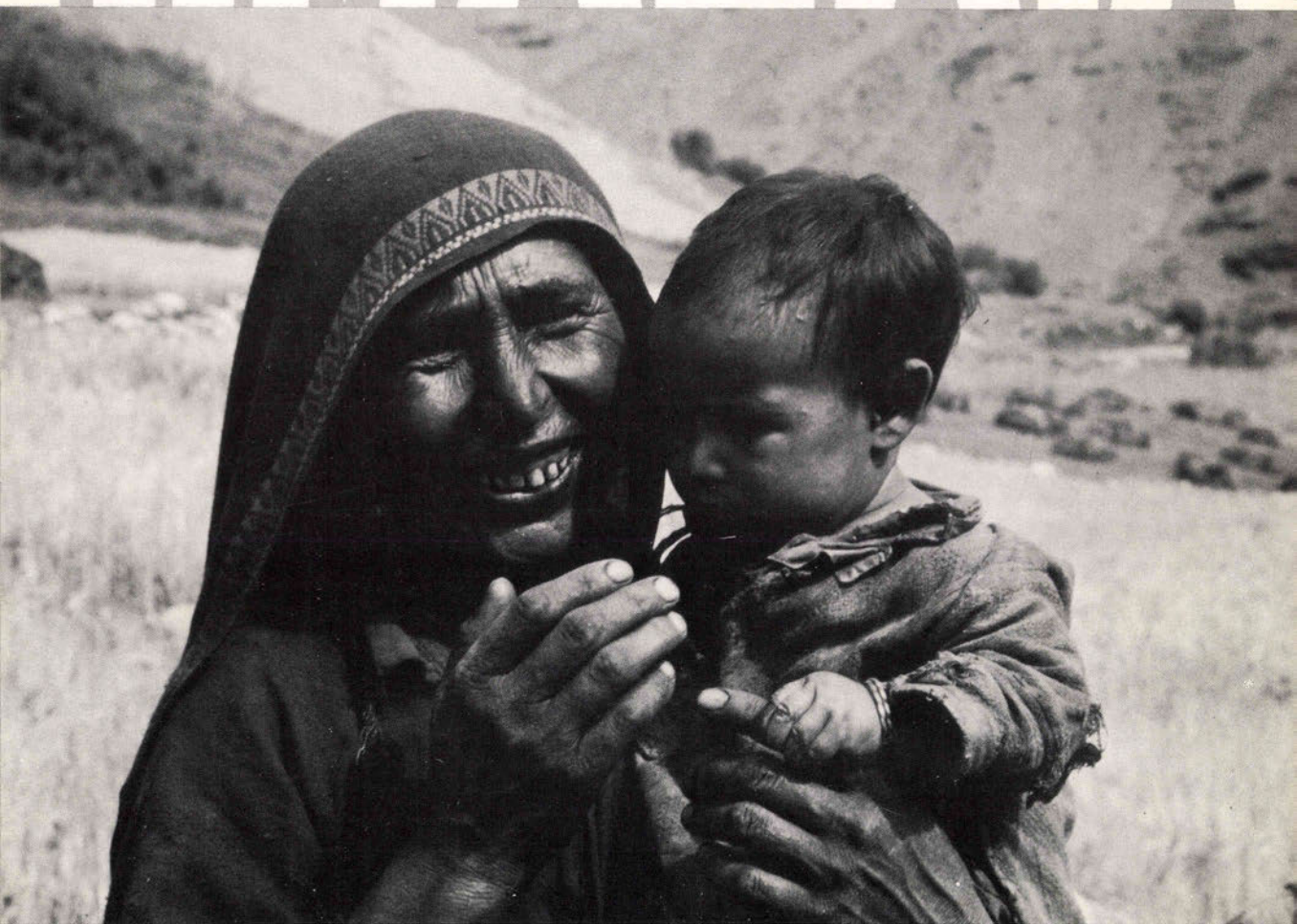


ヒマラヤ

No. 117

● 特集

カンチェンジュンガ 1981



1981 AUG

日本ヒマラヤ協会



THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

1982年ヒマラヤ登山学校隊員募集

クン (7,077 m)

1980年登山学校は、20名中19名がケダルナート・ドーム(6,831m)に登頂するという成果をあげて帰国しました(本誌109号既報)。隊員の中にはすでにヒヤラヤ、アンデス、アラスカ等における高所登山経験者から、国内の冬山すら未経験という人にいたるまで幅広い層が参加していました。HAJでは経験豊富なインストラクターのもとに、正しいセオリーにのっとり安全確実な高所登山を指導しております。隊員はすべて、装備・食糧・梱包・輸送・渉外等の具体的な準備実務にも参画していただき、また国内での強化合宿も行なうなど、ヒマラヤ遠征全般について体得することができます。次回には自ら遠征を行なえる人材を養成することが、この登山学校の主眼となっております。実際に、卒業生の中には自ら隊長となって隊を組織し、成功をおさめて帰ってくる意欲的な人もでてきております。

1982年度はカシミール・ヒマラヤの秀峰クン(7,077m)にて実施する予定であります。ふるって御参加下さい。

実施要項

目的 ①クン(7,077m)登頂

②高所登山の基礎修得

時期 1982年7月末～8月末

負担金 69万円(航空運賃の変動等により変わることもあります)

定員 20名(申込順)

インストラクター4名(医師含む)

申込み 1981年11月末までに下記宛に申込みと(資料を送ります)

〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1
淀橋食糧ビル506 日本ヒマラヤ協会

この登山隊の旅行手続は、(株)西遊旅行が担当します。旅行業代理店業1976号

表紙写真

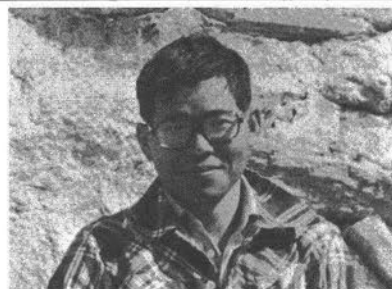
ザンスカールへの入口、バルカチで会った母と子。戸外での労働のためであろうか、このあたりの人達は実際の年齢よりも年とって見える。爪は伸びる間もないのか深爪の状態で、労働の激しさを物語っている。(提供：中垣淑子)

ヒマラヤ No. 117

1. ヒマラヤ放談 ————— 武 田 文 男
4. ヒマラヤニュース<地域・インフォメーション・新刊>
6. 特 集 カンチェンジュンガ1981
16. 連 載 ヒマラヤ閑話④ ————— 水 野 勉
- トレッキング許可で登れる山⑩<バルチャモ> ————— 藤 原 一 孝
24. 寸感・事務局日誌

ヒマラヤ放談

新聞の山の記事はどんな人が書くのだろうと前から思っていた。元登山家か、それともよくある机上登山家だろうか、などと思いをめぐらせながら朝日新聞社の武田文男記者にお会いした。ところが、現在も四季を問わず山登りをつづけ、冬はクロスカントリーに打ちこんでいるという。静かで楽しい山を、という氏の語り口は、記者でなく現役の登山者だった。



武田 文男

●大学山岳部全盛時代とヒマラヤ

—— 今日はいつもと逆の立場になってしまっています。

武田 そうですね(笑)。我々はどっちかというと聞く方が商売ですから、こんなことは初めてですよ。

—— 朝日新聞の山の記事を担当されているわけですけど、どんな山をやってこられたのですか。

武田 僕は東京生まれなんですが、父が山好きで子供の頃から郊外の山にしょっちゅう連れていかれてね、それで山が好きになりました。中学のとき生物クラブに入って仲間と山に登って、高校では山岳部でした。その頃からいろんな山の本を読んだり、聞いたりしてヒマラヤに憧れてね。それで早稲田に入ってすぐ山岳部に入りましたよ。その頃はヒマラヤといえば特殊な人間しか行けなかったんです。年に1隊ぐらいでしたか。それも限られた大学山岳部か、日本山岳会の上のボスとつながりのあるところでしたね。

—— いっ頃のことでですか？

武田 入学したのが昭和29年ですから、30年前の話です。

—— 当時の山岳部というと、僕らには極地法とかヒマラヤ至上主義、シゴキといったイメージが付きまとうのですが……。

武田 そうですね。マナスル登頂が昭和31年ですから、当時はそんなものの全盛でした。山岳部は山岳部なりに、いい山行もしていたのですが、そうとられてもしかたないようなことをしていましたね。

山の登り方も40～50日かけて冬の剣をやるんですよ。馬場島にベースをつくって、3～4つの前進キャンプを出すんです。それで登頂者はほんのひとにぎり、あとはポッカ専門ですよ。ちょうど今のヒマラヤのようなものです。

シゴキといったら、それはもう大変なものでした。新人は受験をすませてきたばかりで、みんな小さくてヒョロヒョロしているわけです。それがいきなり17貫の荷物を担されて、合宿につれていかれる。そうすると、ちょうど梅雨のまっさかりのぬかるみの中で、バッタバッタと新人が倒れる。そこをシゴかれるんですよ。ある時それを立山の強力が見てですね、「この人は病人なんだからオレに担せてくれ」と言って仲に入ってきたことがありましたよ。その時のことは忘れられません。そうした荷担ぎ専門の人から見てもひどいなあというトレーニングをしていたんです。ビッケルが折れるほどゴいたり、刑事事件としては表ざたにならなかつたけれど、それに近いシゴキは一般にかなりあったのではないのでしょうか。

—— そういうシゴキというのは日本独得のも

のでしょうか。

武田 そうでしょうねえ。たぶん戦前のドイツの影響を受けているんじゃないかと思いますよ。ナチスドイツの全盛の頃、大遭難を起こしながらもナンガ・バルバットの攻略作戦をやりましたね。あの頃の本が翻訳されて愛読されましたから、突撃精神というか、山に命を賭けるといったヒロイズムのようなものが、シゴク側にあったんじゃないでしょうか。それと、戦後の大学山岳部の基礎をつくった人たちが、戦争帰りだったということも大きな意味をもつでしょうね。

—— 武田さんが幼いころから山が好きになって高校時代まで楽しんできた登山と、そうした登山は本質的にだいぶ違うと思うんですが、疑問は感じられなかったですか。

武田 ありましたね。自分の本当に楽しい山登りができないで、まるで苦行をやっているものでしたから。そんな嫌なことに1～2年耐えたと、今度はシゴク側にまわるわけですよ。そんな矛盾に耐えられない者もまわりにたくさんいて、僕を含めてやめていきました。当時、山岳部に残るのは、よほど利口な者か鈍感な人でしたね。利口な人は先をみこして、じっと耐えていればいつかはヒマラヤ登山隊員に抜てきされると期待していたのではないのでしょうか。

—— 近頃では、昔の大学山岳部は強かったというような美化する傾向もあるようですが。

武田 一部にあるようですが、僕はそう思いませぬね。大学山岳部は、一般の人たちとは違うんだ、山はヒマラヤへ行くための道場で、遊びで来ているんじゃないんだ、次元が違うんだといったおごりがあったと思いますね。山のクラブらしくもっと楽しくやるべきでした。自分たちばかりでなく、一般の人たちの楽しみまで壊していたところがあります。公衆の前でがなりたててシゴイたりして、ずいぶん迷惑をかけたはずです。

—— 山岳部をやめられてからは？

武田 やっぱ山が好きだったんですねえ。高校の山岳部OBとよく山に行っていました。主に冬やりまして、南アルプス、八ヶ岳、乗鞍岳によく行きましたよ。他のシーズンは、ウェイトリフティングをやりました。それでいつのまにか、テヘ

ランで世界選手権が行なわれたとき、日本の代表になってしまいましたね。その帰りにエルブルース山脈に行ったりして、ずっと山と関ってきました。朝日に入ってから、山が好きなので長野支局に配属してもらったんです。そのあとは九州で、今度は山は山でも炭坑の「ヤマ」で(笑)そんな取材を多くやりました。東京の運動部に来たのは11年前ですが、オリンピックのほかに登山も担当したので、まあ、わりと山も見てきたし、山に登る人たちとの接触も多かったですね。

●古い体質の残るヒマラヤ登山

—— 有名無名を問わず、いろんな登山者やスポーツ選手と接してこられたと思いますが、登山者和其他のスポーツ選手との間に気質の違いなどを感じられますか？

武田 同じですね。ただ山登りをする人たちは、自分たちがたいへん立派なことをやっているんだと思いこんでいるふしがありますね。登山隊の報告書を読んでも、自分たちのルートがいかにすごくて、他の隊がつまらぬルートをやっているか、といったのが露骨に出ているのがありますよね。そんな状態だと、もし事故を起こしてもそれを徹底的に論じないでなおざりにするから発展性がない。

—— 思い当たります。昔のように年1隊ぐらいしかヒマラヤに行けない時代から、主流が社会人山岳会に移りヒマラヤも大衆化してますね。国内でも山の登り方が多様化していますが、そんな傾向をどう思われますか。

武田 幅広くなって、いろんなジャンルが出てきておもしろいと思いますね。重箱の隅をつつくような登山と言われたって、新しい技術がなければ登れないわけで、開拓の喜びがまだまだある。岩登り競技だってオリンピックのようにいかに速く登るかという新しい生き方ですよ。

だけど、そうしたひとつのジャンルにすぎない登り方が、花形というか表舞台に出てくるようなことになると思う。そうした競技のようなものが前面に出てきて、まわりから騒がれてもてはやされるようになると、また別の形で何十年か前に大学山岳部がやってきたような、愚にもつかない体質が生まれてくるんじゃない

ないでしょうか。そうなると本来あるべき登山の楽しさというか、良さが失われていってしまうように思えますねえ。例えばヒマラヤでも、みんなで山登りをやっているのに、たまたまその中の特異なキャラクターだけをとりあげてヒーローにしようといったことがありますけど、これは僕らマスコミも含めて十分反省しなければなりません。

—— さきほどの大学山岳部のお話ですが、はじめは考古学的な興味でうかがっていたのですが、そんな山岳部的な体質が、今も僕らのヒマラヤ登山に残っているんじゃないかと思えてきたのですが……。

武田 そうでしょうか(笑)。そんな風潮は一部であるかもしれませんねえ。

●これからの登山は

—— ここ10年くらいのうちに、ずいぶんとヒマラヤも大衆化して、バラエティに富んできたわけですが。

武田 そうですね。日本山岳会のエベレストだって、ついこの間ですからね。特殊なエリートだけでなく、誰もが行けるようになった。これは大変ぜいたくで、ありがたいことだと思うんですよ。自分がまだ歩ける時代にこんな状況にぶつかってよかったと思うね。

—— で、今後どのように展開していくと思われませんか。

武田 ジョー・タスカーが日本に来たとき、「今、英国の登山界はたいへん反省している。昔やったような大遠征隊は罪悪だと分った。だから私は少人数で、かけぬけるようにすつと行ってすつと帰ってくる。それが自分のためにもヒマラヤのためにもいいんだ」というようなことを言っていました、非常に印象に残っています。それを聞いて、彼はやたら岩壁ばかり登っている男じゃないなと思いましたね。そういう登山がこれからの主流になるでしょうし、なって欲しいと思います。

—— いいですね。憧れます、そんな登り方に。

武田 この間、「バック・パッキング入門」というアメリカ人が書いた本を読んだんですが、いいことが書いてありましたよ。実に繊細な感覚で自然との接し方を提案しているんです。

例えば、美しいお花畑に1本の道がついたら絶対それからみ出さないで歩こうとか、テントは黄や赤は目立つが深い森の中では場ちがいで、周りにとけこむような服装やザックを選んでほしいと言ったことを書いているんです。隣の人たちのテントとは少なくとも10m以上離してテントを張ろうとか、自然や他の人たちに対する思いやりというのかな、大切にするというのか、実に繊細なんだなあ。いいねえ。

—— 先年、亡くなった川崎隆章さんが、そのようなことをおっしゃっていましたが、定着してないようです。むしろ観客を意識してファッション化する傾向にありますね。

武田 そう。だけどそういった気持ちで山登りをする人が増えてきて欲しいと思います。そうなれば、ヒマラヤに行っても、地元の経済や環境を破壊することも少なくなるだろうし、シェルパや現地の人との接し方も変わるはずだと思うんですよ。僕があちこちで見てきた印象では、大部隊で行って、ポーターやシェルパまかせの登山やトレッキングをするのは、どうも日本人に多いようです。

—— これだけ多くの人が世界中の山に出かけるようになった現在、タクティックスや技術面ばかりでなく、そうした方向にも眼を転じなければならぬでしょうね。

武田 僕らが山岳部時代は、あんな登り方をしていたのに、わずか4分の1世紀のうちに、そんなことを考えなければならなくなったというのは、それほど急速に自然が追いつめられ、尊いものになってきているということですね。僕は今も山登りをやっていますから、そんなことをいっそう強く感じるんですよ。

—— 最近はどこなところに行かれますか？

武田 八ヶ岳のふもとに小さな農家を借りていて、そこをベースに八ヶ岳や南アルプスによく登っています。息子が中学1年になって、近頃じゃ僕より強くなったかな(笑)。冬は5年前からクロスカントリーをやっていますが、あれはおもしろいですよ。どうですか、今度一緒にやりませんか。

—— やってみたいです。お供します。

今日はどうもありがとうございました。

(インタビュー・構成 細貝栄)

地域ニュース

《インド》

IMF事務局オフィサー変わる

インド登山財団（IMF）の事務局には、今までモンシーラム氏が詰めていたが、昨年で退官し本年から新たにクリシュナン（KRISHNAN）氏が就任している。モンシーラム氏と同年輩である。

ナンダデヴィ開放さる

1979年より登山隊の規制がされていたガルワールの盟主ナンダデヴィが、この秋から登山隊に開放された。来春には日本隊が入る模様。

ブギ〜ダブラニ間自動車道開通か？

1978年の大洪水による大規模な土砂崩れのため不通のままになっていたガンゴトリ山群へのアプローチであるブギ〜ダブラニ間の改修工事が急ピッチで進み早ければこの秋に開通される模様である。

《パキスタン》

トレッキング規則一部変更

パキスタンのトレッキングにはリエゾンオフィサーを同行しなければならなかったが本年6月になって一部改正され、リエゾンの同行は不要となった。ただし、ガイドを同行しなければならない。高度も5,800mまで行けることになった。

なお、トレッキングパーミッションは現地で申請すると許可取得まで2週間ほどかかるため、出発前に現地のエージェントを通して申請するか、或いは在日パキスタン大使館にて申請を済ませておくことが望ましい。

ゲストハウスSILKROADにぎわう

イスラマバードにオープンしたゲストハウス、シルクロードは日本の多くの隊でにぎわっている。日本人の奥さんをもつMr. サミルがエージェント

稼業も行っているので便利さが買われたらしい。ハウスの雰囲気はカトマンズのランジャンハウスに似ているとのこと。

インフォメーション

S・R・シャルマ氏歓迎会

期日 7月18日(土) 17:00～19:00

場所 東京・海洋会館

会費 8,000円

申込 HAJ事務局

ネパール・ヒマラヤ研究会

期日 7月18日(土) 14:00～16:00

場所 東京・海洋会館 コーラル・ルーム

中央線大久保駅下車1分

会費 1,500円(資料代含む)

内容 シャルマ氏を迎えて新解禁峰をめぐる問題について質疑を行います。

申込 HAJ事務局 TEL 367-8521

定員 80名

日本ヒマラヤ会議

(第11回 京都会場)

期日 7月19日(日) 10:00～16:30

場所 京都伝統産業会館(岡崎京都会館の向かい側)左京区岡崎成勝寺町

会費 2,500円(資料代含む・昼食は各自)

定員 50名

申込先

内容 10:00 開会

10:10 最近の高所登山戦術の傾向(山森)

13:00 カンチェンジュンガ登山報告(山森)

15:00 ネパール新解禁峰をめぐる諸問題

(S・R・シャルマ氏)

(第12回 仙台会場)

期日 8月23日(日) 10:00～17:00

場所 仙台郵便貯金会館（仙石線榴ヶ岡駅下車数分・仙台駅からタクシー5分）

会費 2,500 円（資料代含む・昼食は各自）

定員 70 名

内容 10:00 開会

10:10 最近の高所登山戦術の傾向（尾形）

13:00 カンチェンジュンガ登山報告（八嶋）

15:00 インドヒマラヤ（H・C・サリーン氏）

新刊図書一覧

①中村元、「インド仏教研究文献通観 — Indian Buddhism - a survey with bibliographical notes —」、関西外国語大学出版局、1981・、423p（B5判）、21,000円。

②中国美術家協会貴州分会・中国人民美術出版社／編、「中国貴州苗族刺繡」、美乃美、1981・4、168p、12,000円、（「中国工芸美術叢書・中国少数民族染織刺繡篇」・第一巻）。

③稲越功一、「風の炎 — 印度朱光」、北欧社、1980・10、156p、3,500円、（写真集）。

中国語図書

①楊通山・他編、「侗族民歌選」、上海（中国）、上海人民出版社、1980・12、380p〔写真〕、0.94元＝560円、（初版＝4,350部）。

②朱宜初、「民族民間文学散論」、昆明（雲南省）・中国、雲南人民出版社、1980・9、199p、0.45元＝270円。

③莫杰、「南寧史話」、南寧（広西省）・中国、広西人民出版社、1980・9、88p、0.30元＝180円、（初版2,800部）。

④苏勝興他編、「瑶族民間故事選」、上海・中国、上海文芸出版社、1980・10、5＋343p、0.96元＝580円、（初版29,000部。「少数民族民間文学叢書」）。

⑤田継周・蜀之基、「西盟佤族社会形態」、昆明（雲南省）・中国、雲南人民出版社、1980・10、3,146p、0.42元＝260円、（「雲南少数民族社

会研究叢書」）。

⑥汪寧生、「雲南考古」、昆明（雲南省）・中国、雲南人民出版社、1980・6、231、104p(plts)、4元＝2,000円、（精裝版3,070部）。

⑦同字典編写組・編著、「新編蔵文字典」、青海人民出版社、1979・6、887p、2.80元＝1,400円。

⑧中国科学院・編著、「青海湖総合考察報告」、北京、科学出版社、1979・2、6、270、20p、4.40元＝2,200円（精裝版）、3.40元＝1,700円（平装版）、（精裝版2,500部。平装版1,350部）（資料：藤井毅）

トピックス

秋田ヒマラヤ会議報告

日時 昭和56年6月13日(土)13時～14日(日)12時

第10回秋田会場は新緑の美しい田沢湖高原にて開催された。定刻を少し回って今回の事務局である福田文二氏の挨拶の後、山森事務局長から会議の目的について経緯が話され、講師紹介と参加者の自己紹介があり早速会議に入った。

杉本忠男講師による「カラコルムにおける登山と諸事情」は、日本隊の最近の傾向とパキスタンのイスラム化が強化される傾向にある等の現地の事情について話された。又登山規則の変更やポーター賃金の事情について詳細に説明があった。次いで中江啓介講師より昨年立命館大学パーティによって行われたインドヒマラヤ二つの登山についての報告があった。この登山はプレのパンワルドワール(6,663m)を通常の包囲法で登り2ヶ月間をマナリ周辺で過した後、ヴァスキ・バルパット(6,792m)を5泊6日のラッシュで登頂したもの。アルパインスタイルでの登山へ移行する一つの過程としてもっと試みられて良いのではないかと思われる。

夜は懇親会をはさんで各隊のスライドや8ミリを上映して夜遅くまでヒマラヤ談議が続いた。

二日目は「最近の登山方法と高所医学」について西郡光昭氏より興味深い話を聞き質疑応答も活発であり12時散会した。参加者25名。



1 登山

■ はじめに

ネパールの東にそびえ立つ巨大な山塊カンチェンジュンガ山群において8,500mの高みの縦走を行うことに至った発想や、その後の計画変更については「ヒマラヤ99号及び111号」に又、偵察隊(1980年)や本年の行動概要については「カンチェンジュンガ通信」としてそれぞれ「ヒマラヤ102号~105号、113号~116号」に書きまとめたので参考にされたい。ここでは、戦略や戦術の重要と思われる部分について報告させていただくことにする。

■ 戦 略

今回のプロジェクトは正式に発足してから実施されるまで5年間を要した。その間このプロジェクトを囲む状況は、めまぐるしく変化し、その都度機敏な対応を要求された。

◎発足時(1976年)の戦略

イ) H・M・I、IMFへのアプローチ

目標とするカンチェンジュンガ三山(主峰、中央峰、南峰)は、インド側、ネパール側ともオープンされていなかった。我々の希望は南峰東南稜からの主峰だったので、インド側へのアプローチを行った。特に合同登山が許

1981年5月9日カンチェンジュンガ主峰とヤルンカンの頂上で10名のアタッカーは、無念の涙をのんで「縦走断念」の決定を聞いた。ここに、その報告をお届けする。

可取得の早道と考え(1975年にはカシミール州政府と合同でヌン峰登山を行った実績があった)、ダージリンのH・M・Iを訪問し要人と会談し許可の打診を続けることにした。I・M・Fについてもインド岳界や経済界の要人を通して許可打診を続けることにした。

—— H・M・Iには二度訪問。同校の機関誌の終身会員に数名がなった。I・M・Fへは事あるごとに足を運び1977年3月に正式に登山許可申請書を提出した。

ロ) プレ・カンチェンジュンガ計画の推進

目標としたカンチ三山は、東南稜も含めるとその4kmは8,000mを越え、かつまた、南峰(8,491m)から中央峰(8,496m)を越えて主峰(8,598m)に至る稜線は2.5kmに及ぶ。このような高く長い稜線を突破して主峰に至り目標を達成するためには、計り知れない困難が待ち受けており、それはこの計画を推進する過程の中でも同じことであった。

しかしながら我々の人的資源は残念ながら力不足である。そこでカンチ縦走参加を希望する隊員を一つの完結したプロジェクトの中で高々度体験させこれにより以後のプロジェクトの推進力とするために1978年に7,500m

以上の山に登山隊を派遣することにした。

—— 1978年、カラコルム・パツラII峰(7,730m)で実施されたが、この登山を推進する過程でメンバー結集方法等でつまづきその上、初登頂には成功したものの、結果的にはメンバーはこの登山で燃えつきカンチ縦走プロジェクトに参加するものは皆無となってしまった。

◎カンチエンジュンガ(ネパール側)解禁時の戦略(1977年)

イ) ネパール政府観光省へのアプローチ

1977年8月、ネパール政府はカンチエンジュンガに登山許可対象の山として発表した。それまでインド側からのアプローチを続けていた感触として許可取得には非常なる危惧を抱いていたのですぐさま検討し、以後ネパール側からのアプローチを行うことにした。我々の実施年度は1981年であり、この年度が確定しなければ準備に支障があるため強力な渉外を展開することになった。

—— 1978年4月渉外員をカトマンズに派遣した。この結果1978年8月カンチエンジュンガ1981年プレの許可取得に成功した。

ロ) 偵察隊の派遣を決定

カンチ南峰はその南西面を登路とせざるを得なかったが、特に8,000m以上の部分が稜と壁で構成されており技術的にも非常な困難が予想されたので、登頂する態勢の強力な偵察隊を派遣してルート確定を行うこととした。又、南峰から中央峰へのコルへの下降はこの稜線上では最も困難と思われ、一担コルへ下降すれば登り返すことは不可能と推測された。従って縦走者の不時の退却路を確保するためコルから南峰南壁へエスケープするルートを探ることも偵察隊の任務となった。

—— 1980年3月から6月にかけて7名の偵察隊を派遣して充分なる偵察活動を行った。この時の情報が本年の戦術に生かされ縦走態勢を作り上げる上で重

要な役割を果たした。

ハ) 収容ルートの変更

登山はより純粋な形で行われることが望ましいのは論をまたないところである。我々の縦走も往復型か収容型で激論が交わされた後、収容型が採用された。それは南峰からの縦走者を主峰エバンスルートから収容するというものであった。しかし、現実的な検討を重ねる中で、この稜線を一日で走破するのは困難であるとの結論に達し、収容ルートを中央峰と主峰のコルに変更した。

—— 結果的には実現しなかったが、このルートの採用により縦走は高い確率で成功が予想されるまでになり、準備活動にも一層の力が入ったのである。

ニ) 酸素ボンベを使用する

不確定要素の多い登山界には常に「神話」が物事の多くを決定していた。日本の冬期岩壁登攀も、ヒマラヤの高所登山の世界も例外ではなかった。こうして高所登山の分野では、酸素ボンベの携帯が定着した。

しかし、登る対象が限定されてくると当然のごとくより純粋な形での高所登山を目ざす傾向が増え、今や酸素ボンベレス登山は、8,000mを少し超えた頂上へ向かう隊の常識となったのである。

我々も当然この傾向の中にあっただけではあるが、純粋であればあるほど肉体的、精神的つまりは人間的に不自然になることもまた、知られるところとなった。登山そのものが、一般の人にとっては忍耐の連続(肉体的、精神的、経済的に)と思われているのとは、裏腹に、ある一定のトレーニングされた(この場合、だいそれたことではなく)者にとってはそう困難なことではなくなったのである。だが我々の目標はあくまでも縦走であった。

我々は、我々のメンバーの力によって、この8,500mの縦走を酸素を補給しない型(通称無酸素)で行うことは無理と判断した。それは行動のみならず睡眠中においてもしかりである。むしろ、行動中の酸素補給よりも睡眠中の酸素補給の方が、酸素ボンベを使用

する効果が高いことも解った。

従ってこの計画で200本のAMP酸素ポンプを使用することになったのである。これは昨今の高所登山界がより純粋な登山の可能性を求めて酸素ポンプレスの登山を追求しているのとは逆行する試みであった。

◎メンバー再結集時の戦略(1979年)

ブレ・カンチェンジュンガ計画が一つの防波堤ともなっていたこのプロジェクトは、バツラII峰の登山が行なわれている段階でも強力に推進されていたのだが、このブレ・カンチ即ちバツラII峰が終って大きな変動を余儀なくされた。即ち、バツラIIでは、カンチプロジェクトに参加する者はなく、バツラIIと同時期、所属する山嶺登高会のヒマラヤ遠征で同山群、ハチンダールキッシュ(7,163m)に参加していた、プロジェクトの推進メンバーであった亀井建樹も同山で非業の死を遂げたからである。

バツラII峰登山は、推進の途中から、ブレ・カンチ計画ではなくバツラII計画として独立して進めざるを得なくなっていた。当初のカンチなくしてバツラなし／との覇気もなく、齒の抜けたような状態の中でバツラII登山を遂行するだけのメンバー結集になったからであった。そして、その目標も二転三転したのであった。カラコルムからネパールへ、そしてカラコルムへと戻ったこの過程は、当時岳界の中に置かれていたHAJの立場をも反映していた。

当時HAJは、都岳連の傘加団体であったにもかかわらず、そのメンバー構成故に(即ち東京都内在住者が異常に少ない)1976年に出発したワハン遠征以後は、HAJの海外遠征(日山協が対象とする推せん状の枠の中)については都岳連として推せんしない／と云う都岳連理事会(常務理事会)の決定がなされていたからであった。

＝日本山岳会は下部に大学山岳部を多く抱え
その他地方支部が多数あってもこのような
問題に発展しなかったのが不思議である。
当時のHAJは都岳連に加盟して間もない
頃だったのでその活動についても良く理解

されていなかったための誤解であったと思われる。

こうした状況の中で、75年計画を進めた上での組織上のメンバー結集の失敗が再び問われたのであった。一つの計画が現実味を帯びた時、理想や信念と異なる所での価値観が先行して行くのが我々の社会では通常であることを考え合わせれば、これは止むを得ないことであったのかもしれないし、日本のエクスペディションのコアを為している部分であるのかも知れなかった。

とにも角にも、我々の企画立案したバラ色の戦略はその戦術のまずさ故に失敗に期したので三山縦走の基本的な条件の一つである「登攀要員18名」を満たさなければならないことになった。こうして身近な中からメンバーに対する働きかけが行なわれたのであった。1979年1月の時点で今回のメンバー中、現地へ行ったメンバーは9名が決定していた。当然その他の14名も決っていたのだが次々と去って行った。そして1979年春から秋にかけてこの遠征で重要な役割を果たした4名が加わった。HAJという組織故に機関誌ヒマラヤ誌上で公募した隊員も初秋には3名が加わった。80年に入り3名が決まった。恐れていた一年前や半年前のメンバーが4名になったのであった。(通信担当並びに医療担当は出発の2月に決定)

メンバーの結集ほどむづかしいものはない。私自身は1975年遠征で一般機関誌購読者という立場でヒマラヤ誌上に募集されたインド計画に参加して大いなる失望を抱いたものであった。その結果、HAJ内部立案のものは、なにも強制的にヒマラヤ誌上に載せるべきではないと云うのが私の主張であった。それを公募してしまったことに深く反省しているのである。

■ 戦 術

出発の3ヶ月前になって目標とした南峰、中央峰を放棄して、ヤルンカンから主峰をめざすことになった。そのため急ぎ計画全体を練り直したが細部までには至らなかった。既に隊荷は集積されつつあったので間に合うものは減らしたのであるが相当数の余剰物資がネパールへ送り込まれることになった。

◎アタック態勢が整ったら一度BC以下で休養すること

私自身は過去二度のヒマラヤ登山の最終段階で解かっているながら休養なしのアタックを実行し辛い体験を味わう結果となった。この計画の登攀計画を立案した時から、この登山では相当の覚悟をもってアタック前には全員をBC以下で休養させることに固執した。勿論、それを行うことによって最前線に空白期間をもたらし、ルート確保が難かしくなるというリスクを負わなければならないのであるが、それ以上にこのことの持つ意味は大きかった。

—— 結果的には、アタック態勢が整ってから6名をラムゼー(4,300m)で2日間、8名をTP・C(5,150m)で2日間、そしてBCで1～2日間休養させた。この間上部ルートは空白となった。

◎先発隊をABC建設までの任務を与えて先行させる

偵察の結果、ヤルン氷河内に二つのキャンプを設けてBCへ隊荷を集結することが、この登山のキーポイントであることが判ったので、完全に独立した先発隊に①ヤルン氷河内のルート確保②ABC建設の任務を持たせて先行させることにした。

—— 結果的には、7名の先発隊を本隊の2週間前に先行させた。ABC(7,300m)に達するに必要な物資を200名のポーター(この内60数名はカトマンズからのGL用ポーター)と共に運びBC入り後2週間でABCに到達し任務を遂行した。こ



のため本隊は、わずか40日で8,600mの頂上に到達し得た。

◎ファイナルキャンプへの荷上を極小にする

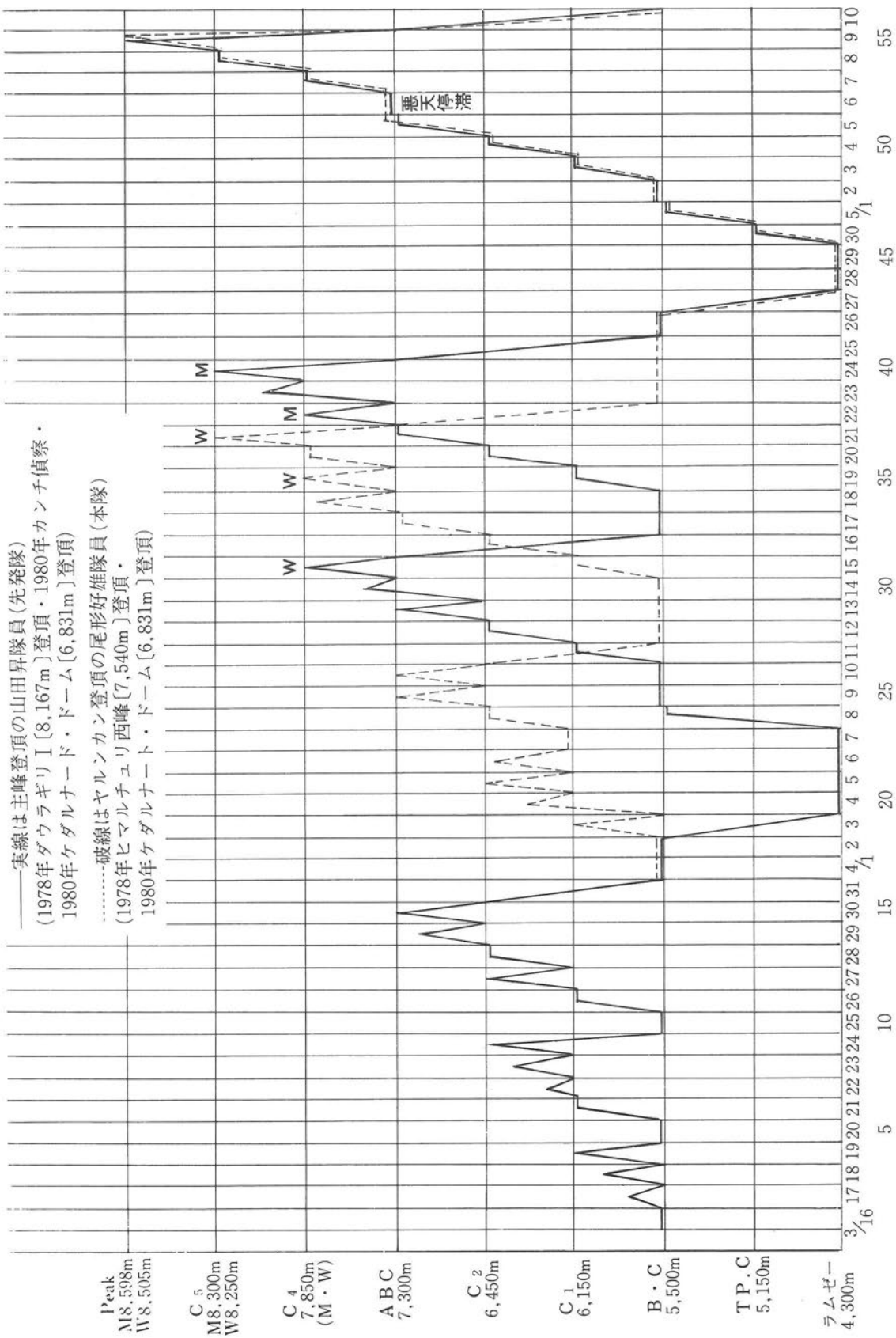
8,000m上を作るファイナルキャンプへの荷上は隊員に負うところが多いのであるが、荷上物資を極力押え、又、可能な限り優秀なHAPを採用することによってファイナルキャンプへのアタック前到達を極力少なくすることにした。これは最終段階における蓄積疲労からくるアクションを恐れたためである。

—— 結果的にはアタック前に隊員11名が一度ファイナルキャンプへの荷上、ルート工作を行い、6名のHAPが一度荷上を行うことによって必要物資が集積された。

◎HAPを選別する

当初計画からC4までの荷上はHAPを主体として行うことにした。これは隊員はルート工作を主とし縦走態勢を上部まで持上げるために全力を尽すことにしたのである。

—— 結果的には、サードー2名を含めてHAP15名を投入し下部キャンプの荷上に従事させ隊員には一定の負荷をかけるにとどめたが、隊員の疲労度を考えるとやはりHAPなくしてこの計画は遂行できなかったであろう。





—カンチェンジュンガ・ルート概念図—

■ おわりに

今回の登山は、高所登山経験者の占める割合が多くパーティ編成、登山行動そのものについては比較的楽であった。しかし、山はいつもその最後にドラマを用意している。5月6日、ABCとBCで交わされた前進か停滞かのやりとりや、縦走中止に至る各人の胸中にうずく思いやり等々が、今でも私の脳裏に鮮やかによみがえる。

大人数故に或いは酸素ポンペを携行したがために、そして最終的に縦走を完遂できなかった故にともすれば、白眼視されがちなの登山ではあったが、隊員一同の充分な働らきに感謝しつつ、共に全員が下山できた幸をかみしめている。最後にこう自己評価しよう。

——結果は完敗であったが過程は素晴らしかった。

(文責：山森欣一)

カンチェンジュンガ・トラバース敗退記

ヤルンカン・トラバースリーダー 尾形 好雄

昨日、ヤルン・カン側の方はC5建設に手間どり、シュラフに潜ったのは10時半頃であった。キャンプサイトのカッティングで酷使した上腕の筋肉がほてり、アタック前夜というのにほとんどまじりとしないうまま1時50分に起き出す。

なにもかも凍てつく冷凍庫のようなテントの中でコンロに火をつけ、暖を取りながら白湯を飲む。昨夜からお茶と行動食のみの食事である。

4時の交信で主峰側のサポート隊はすでに出発したと云う。こちらのサポート隊はさらに1時間程遅れて5時15分に出発する。我々トラバースの方は、アタック装備を着装したまま1時間程待機してからC5を後にする。ところが出発してみて、驚いたことには、サポート隊はまだ80m程しか進んでおらず今日のアルパイトが懸念された。

酸素を毎分1ℓにしてサポート隊の後についてビスタリ、ビスタリ登っていくも時間ばかりが気に懸る。

WC5からはクローワール内を一条に走るラビーネンツークに登路を取る。ラビーネンツーク内はアイゼンが気持ちよく利き楽な登高であったがトップのピッチは遅々として上がらなかった。ABCからC4、C5、そしてアタックとこの3日間サポート隊の人達は連日ラッセルのアルパイトを強いられておりその蓄積した疲労が動作を緩慢にしているのであろう。

辺りの岩稜に朝日が当りだしても、クローワー

ル内には陽が射し込まず、トップのラッセルを待つ間、手足がかじかんでくる。

WC5を出発してから3時間後(午前9時)、漸く頂上直下の灰色岩壁帯の基部に到着する。もうすでに主峰側は頂上に立っているのではないかと思うとトランシーバーのスイッチを入れるのが恐しかった。

この基部からは左に走る雪面に入り、100m程登った地点から右に折れて頂上岩壁を登る。

もうこの辺りからトップを交替しようとも考える。遅くとも10時には頂上には思っていたものの、頂上は未だ遠く時間だけがどんどん過ぎ去るのみであった。

八嶋にトップ交替を告げ、角田と替わる。岩にへばりついた不安定な積雪層はトップの足をひっぱり登高は難渋する。

主峰の眺望を妨げていた右側の岩稜が俯瞰できる様になってからカンチ主峰の方へ目をやると主峰隊も今が頂上に立つところであった。

ところが、この頂上まであとわずかという地点に来て飛田の酸素ポンペが空になる。酸素が切れたといわれ愕然とするも良く考えてみればすでに7時間近くも経過しているのである。間もなく角田の酸素も空になり、この予想以上の登高時間にトラバースの敢行、サポート隊の下降というものに危機感を抱く。

角田の縦走用酸素ポンペを替って背負い、飛田

角田にはそのまま無酸素で登って貰うことにする。

酸素の切れた地点から2ピッチ約100m程グズグズに脆い岩場を登ると目の前にヤルン・カンのスノーピークが在った。(12時30分)、さらに20～30分過ぎてから八木原、飛田も到着し、ヤルン・カン側の隊員5名は、それぞれ頂に足跡を印す。

BCの隊長と長い交信のやりとりの後、“トラバースは中止”との指示を受け、長い間夢みてきたカンチのトラバースは終わった。己れの力を十分に発揮する前に閉幕となってしまった無念さにとめどもなく流れ落ちる涙はどうしようもなく、只々残念でならなかった。頂上からの主稜線を狭んで対峙す

る主峰には主峰隊のメンバーが立っており、またしても3年前のヒマルチュリの時と同じ思いをさせられた。

何んの感激もないまま頂上での儀式を終え、下降に入る。下りは始める頃には午前中の天候も崩れ、ブリザードに見舞われる。白い悪魔の狂宴はゴーグルを雲らせ視界を妨げる。雪盲を恐れながらもゴーグルを外して下降する。

頂上直下から2ピッチ(100m)フィックス・ロープを施こして安全を喫する。フィックス・ロープが無くなったところからは一步一步慎重にクローワールを下る。一直線に滑り台の様ななぎ落ちたクローワールはそれこそ全神経を集中させての下降であった。

16時20分、WC5へ帰着、早速、撤収にかかる。暫く遅れてから角田そして飛田、さらに遅れて八嶋、八木原が戻り、全員無事にクローワールを降りきる事ができた。

角田に一足先に下って貰い、自分はテントを撤収してから膨れ上がったザックを背に下降に入る。続いて飛田、八嶋、八木原の順で下り、殿の八木原が下降に入った時は18時をとうに過ぎていた。

C5からはフィックス・ロープに導びかれなが



ヤルンカンのC.5 上部のクローワール内で休憩する八嶋隊員

ら1ピッチ毎慎重に下る。12ピッチほど下った所でルートのだ真中に雪崩の跡があり、昨日でなかったことに感謝する。

すでに撤収されたC4に辿り着いた頃にはすっかり陽も暮れ小雪もパラつき始めた。C4にはサポートの佐久間と角田が待っていてくれたが、C3迄のホワイ・アウトが懸念された為に2人にはトレール確保に先行して貰う。

すっかり撤収されてしまったC4で一人、後続を待つもなかなか現われず、じっとしていると厳しい寒気が手足の先からしのびよってくる。20時近くになって漸く3名が到着、かなり疲労困憊の状態であったが、休憩もほどほどにC3に向けて腰を上げて貰う。

クローワールを降り切った安堵感とこれ迄の蓄積疲労のせいか、C4からはさらにベースが落ち闇夜のグレート・シェルフの中を長い長い下降を強いられる。

5月9日というトラバース敗退の無念の日が翌日になろうとする23時40分、我々は漸くC3に帰還した。

2 学 術

カンチェンジュンガ学術遠征隊のうち、4名の学術隊は4月30日にヤルン氷河に入り、カンチェンジュンガ主峰およびヤルンカンの登頂日、5月9日には、登山隊員によって両峰に設置された測標の視準に成功、以後6月中旬現在も調査活動を続行中である。なお、学術隊4名のうち小林隊員は登山隊とともに一足先に下山し、6月8日に帰国した。以下は同隊員による学術隊の活動の中間報告である。

学術隊の4名がカトマンズに集結したのは、4月9日と、当初の計画より大きく遅れてしまったが、これはネパール側の行政事情により、カンチェンジュンガ山城方面における学術調査活動に許可が得られなかったためである。ランジャン氏の努力によりようやく道が開かれたが、五百沢智也

隊長と松岡憲和隊員の到着に際して、重要な測量器材であるトランシットと光波測距用のプリズム各1台がカトマンズ空港で通関差止めを食うという事態に遭い、前途多難を思わせるスタートとなった。測量活動の眼目は登頂時に合わせて山頂の測量を行うことにあり、当の登山隊は順調にC1、C2の建設を完了、頂上に接近中、との情報も入っていたので、一刻の猶予もならぬ状況であった。不幸中の幸いにも、3月28日にネパール入りをしていた小林詢、谷本秀喜両隊員が同種の器材を無事入国させていたので、測量の方は何とかそれだけで間に合わせることにし、早急にカンチェンジュンガBCに向うことにした。

4月13日、多額のオーバー・チャージと引きかえに資材ともども乗合バスに乗せてもらってカトマンズを出発。16日、イラムよりキャラパンを開始した。途中、ポーターのすじの通らぬ要求に悩まされたり、テロクの警察署長の横車により2日間の足止めを食うなどのトラブルがあったものの、4月30日にヤルン氷河に到着した。

学術隊はヤルン氷河下流部のラムゼーに調査活動の基点を置き、登頂日の迫った主峰とヤルンカンの測量のための基点の設置を急いだ。まず、測量器材を氷河上流のターニング・ポイント・キャン

プ（TCP）まで上げ、両峰の視準に好適な地点を物色する。5月4日、登山隊のベース・キャンプを訪れたが、ひとり残って指揮をとる山森隊長を通じて、大詰の段階に入った登山隊全体の緊急感が、そこになまましく伝わっていた。幸い、8日までに氷河の兩岸2地点とBC、TCPの計4地点に三角点の設置を終え、登頂にそなえることができた。

5月9日正午頃、相前後して両山頂に登頂隊員の手で測量ボールが樹てられ、紅白の測旗がひるがえるのがトランシットにより確認されたが、これはヒマラヤ登山史上画期的なことであった。従来は下方から望む見かけの山頂を視準し、標高を求めて



測量基点を設置する学術隊



ヤルン氷河から山頂を視準する(バックはジャヌー)

いたのであるが、今回は登頂者がハンドレベル（水準筒）を持参し、現場で正確に最高点の位置を確かめて設置した測標を視準した。たとえば、ヤルンカンでは、下方より望む見かけの最高点よりかなり隔たり、かつ低く見える位置に実際の最高点があることが分ったのである。このような成果は、今度のように登頂者と測量者が共同してはじめて得られるのであって、下方からの一方的な測量では不可能である。また、山頂から遠くないBC付近に約3kmの長い基線を設けて測量できたことも大きな成果であった。基線の測量には新鋭の光波測量計が大きい効果を発揮した。

学術隊はこの後ひきつづき氷河下流方向へのトラバース測量を続けるのと並行して、トランシットと光波距離計による流動観測を含む氷河調査、地形調査、気象観測を行っていた。筆者は5月16日に学術隊から離れたが、五百沢隊長ら3名はさらにカンチェンジュンガ氷河、ジャヌー氷河、ヤマタリ氷河などが含まれるグンサ・コーラ（チャ・チュー）流域を踏査し、6月中旬まで現地調査を続行することになっている。調査活動全体の報告は隊長らの帰国に待ちたい。

（小林 詢・記）

「ヒマラヤ」表紙写真募集

《規 定》

- (1)モノクロでキャビネ判以上であること。
- (2)被写体は広義に解釈したヒマラヤ地域のものであること。山とは限りません。山麓の風物でも結構です。
- (3)未発表であること。
- (4)未知の地域の写真、あるいはあまり知られてい

ない角度からの写真を期待します。

- (5)採用分には全国共通図書券をさしあげます。

《送り先》

〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1 淀橋
食糧ビル5F 日本ヒマラヤ協会「ヒマラヤ」

花を求めて (11)

水野 勉

いままでこの「花を求めて」にお付き合い願った読者はお気付きであろうが、これまで登場してきた人びとの方法はそれぞれ変っている。東インド社会の人びとは自分たちの庭園のために最良の中国の花々を採集した。キュー植物園や園芸協会から派遣された採集者たちは条約の定めによって海岸でのみ行動を許されただけなので、中国の庭園でみつけた花々のみを集めて本国へ送った。フランス人宣教師その他の人々は、新しく開けた土地の奥地へと入ったけれども、その趣向あるいはチャンスのないまま、ヨーロッパに新種の植物を紹介することはなかった。ジェームズ・H・ヴァイチ、チャールス・マリーズのような旅行者は急いであちこちを歩き廻り、いつもかすめて過ぎるだけで、みのりある成果をあげることができなかった。

最後に登場するのは、専門の採集者で、かれはその生涯の大部分を植物採集に費やし、自分の採集する植物を知り、自分の仕事の本質を知り、自分の向うべき土地をよく知っている。かれは冷静に仕事をする。そこで何がみつかるかを知るためにある地域を訪れ、やがてその後、種子がとれる時期にふたたびそこへ戻ってくる。かれは二者のために仕事をする。一つは標本をほしがる植物学会で、もう一つは新種の植物を育てたいと熱心な園芸家である。採集者は明確な目的をもって出発し、ある限られた範囲を調査し、けっして当てもなく彷徨することはない。だいたい、採集はその男の生活の資であり、いつも真剣である。

ロバート・コォーチューンはあまりにも早く生れすぎた。かれはすぐれた植物採集者となる素質を充分に持っていた。

チャールス・マリーズはその機会を有していたが、その機会をものにするのができなかった。

中国はかれの眼前に広く開かれていたが、無精から、あるいは要領の悪さのために、かれは中国人をうまく取り扱うことができなかった。宜昌峡谷まで行きながら（その西の丘陵地帯には、豊かな花々が咲き競っていたのに）、そこで諦めてしまい、中国には紹介するに値する花々は全くないと報告している。かれはウィルソンが中国へ旅立つときにも次のようにいったと伝えられている。

「君が追い求めるもの一つに力を集中しなさい。あちこちと歩き廻って、時間と金を無駄使いするな。たぶん、中国において価値ある花々はすべてすでにヨーロッパに紹介され済みなのだ」

しかしながら、ヴァイチ園芸場はその言葉には左右されず、ウィルソンを一度ならず二度までも派遣した。

アーネスト・ヘリー・ウィルソンは1876年、グルセスタシャー州に生れた。中学卒業後、ソリヒルに在るヘウィット商会の養樹場に徒弟奉公に入り、後にはストラトフォード・オン・アボンに移った。1892年に、パーミング植物園に入り、その専門学校で植物学を学んだ。1897年にはキュー王立植物園に行ったが、やがて植物学について教えることになった。かれは帝室理科大学に入ろうとしていたとき、キュー植物園の理事が、かれを採集者としてジェームズ・ヴァイチ・アンド・ソンズへ推せんしてくれた。有名な職人ジョージ・ハローの指導の下で、その会社のクーム樹木園で6か月をすごしてから、1899年米国經由で中国へと旅立った。

米国へ着いてすぐ、サージェト教授と親交を結んだ。この人はウィルソンのその後の生涯に非常に大きい影響を与えた。それから太平洋を横断して6月3日に香港に着いた。ウィルソンもジェームズ・ヴァイチも、旅立つ前にまずオーギュステ

イン・アンリの意見や助言を得るのがもっとも重要だと考えていた。この当時ヘンリは南西雲南のツェマオに滞在していたので、ウィルソンはかれを訪れて1899～1900年にかけての冬を過し、そこでの途中、メンツェでのトラブルのために、殆んど仕事をするのを諦めた。しかし、それでも、アンリの植物に関する知識をできるだけ吸収して、みのりある1、2カ月をすごしたばかりでなく、美しい*Gasminum primulinum*を途中で採集したりした。

アンリの助言で、湖北省西部の揚子江沿いの宜昌付近の地域からはじめることにした。ウィルソンが植物採集者として自分をつくりあげたのは、この湖北省と四川省においてであった。湖北・四川の境付近は大部分が石炭紀の石灰岩が何層にも重なって出来ており、その間に深い谷が切りこまれている。非常に稀薄な人口と殆んど通信交通の方法を持たないごとのために、この地域に入るのはいへん困難が伴う。しかし、世界のうちではもっとも豊富な森林帯を構成している。

ウィルソンはすぐれた写真家ではあったが、ちょっと変わったところがあった。それは全判カメラより小さいカメラを全く携えなかった。このことは全生涯を通じて変らなかったと思う。そのために、西部中国における非常に困難な径を進むのにずっしりした重量をかつがねばならなかったし、それにまた、変ったアングルから植物の写真を撮るむずかしさが伴った。

ウィルソンの著作から、かれの多くの旅行の正確なルートをたどることはむずかしい。かれの旅行記 *A Naturalist in Western China* は1913年に発行され、1929年には米国で再版され、*China Mother of Gardens* と題名を変えたが、注意深く読まないと、それは一つの連続した旅行の報告のようにみえる。じっさいには、1903～1905、1907～1908、1910～1911と三つに分れた旅行なのである。

ウィルソンはたぶん他の誰よりも第1級の樹木類を紹介した。それでウィルソンの旅行に関する記述もいままでの人たちよりもずっと長いものになると思う。ここで前以てお断りしておく。

ヴァイチ園のための最初の旅行は、特に *Davida involucrata* を紹介するためであった。最初の年、1900年には、かれは宜昌からあまり遠くには行かなかった。しかし、とにかく仕事ができたということは驚くべきことである。この時期はボクサー争乱の時期であり、湖北と四川の地域にあっては、外国人を心から歓迎するというふんいきはなかったのである。中国の影響力が少ない、雲南南西部にいた、ウィルソンよりはるかに経験の深いアンリでさえ、ほとんど行動できなかった。この最初の2年間にでも、ウィルソンは自分の近くを旅行し廻った。かれは揚子江沿いに相当の時日を費やした。ハウスボールを利用したが、これはゴルジュの中では、あまり安全な方法ではなかった。じっさいに1度、転覆して、カメラや多くの乾板はじめ、備品のすべてを失った。

住民の気持が落ち着いてから、かれはより遠くへ足をのばした。ふたたび、アンリの足跡をたどり、揚子江を南へ北へ歩き廻った。北部の方がより重要な地域であった。湖北省の北西部は石灰岩の丘陵や谷が入り組んでいて、世界でもっとも植物の豊富な地域の一つであった。1日のうちに、25種から30種の樹木類を採集するのも珍しくなかった。ジャクナゲはもちろんであるが、サクラソウのような草生植物も第1級の品種が採集された。

ヴァンチ園の財布の中味も無尽蔵ではなかったから、長い期間にわたって遠くへ旅行することができなかったのだらうともいわれているが、かれが1902年4月に英国へ帰ったとき、1901年だけの採集品で、305種類の種子、906種類の標本、それに加えて、35箱に入った球根や生きている根をもたらししたのである。

ウィルソンは1903年1月にふたたび英国を出発した。ヴァイチ園のための第2回遠征である。今度の主な目的は、*Meconopsis integrifolia* の紹介であった。メコノプシスについては前に述べたから御存知であろうが、ケンの類である。その花の美しさについての評判はすでに英国にひろがっていた。これはたぶん、1、2年前に打箭炉を訪れたA・J・ブラットからもたらされたものであろう。



山

6273m

パルチャモ

小鍛治深雪氏撮影

藤原 一孝

概要とアプローチ

パルチャモは、ナムチェ・バザールの西、ロールワリンとクーンブを結ぶ雪の難所テシラブチャ峠(5,777m)の南に位置し北側に屹立した未踏の岩峰テンギラギタウ(6,782m)のヒマラヤ襲と大スラブとは対象的ななだらかな雪峰です。

私の知る限りでは、クーンブ地方でトレッキング許可証で登れる山としては、内外を問わず最もトレースされて来た山でしょう。

アプローチは、ルクラよりナムチェ・バザールに入りここよりエベレスト街道ドード・コシの流れに別れを告げボーテ・コシに沿って北西に向かい橋を渡り急登を終えると顕著な二俣、左奥の斜面の中に大きなゴンバをかかえたターメの集落に着く。ターメの集落の直ぐ裏手の丘から北方に目をやればチベットに通じるナンパラ(峠)への道が夢想するしかないロマンを感じさせる。

ターメより先述のゴンバの下を抜けターメ・コーラ(谷)に入る。この左岸の広い草原斜面に付けられた道から仰ぐ対面の一連の6,000m峰の岩壁は、地図を見て初めて2,000mという高差に驚き、初めてスケールの大きさを認識させる。

やがて谷がゆるやかに右に屈曲し視界が開けるとテンボのカルカが近づくに連れ識別できるようになってくる。ここをBHとして使っても良いが雪がなければ、さらに30分程上がった広大な草原の上にBCを設けた方が何と言ってもパルチャモの全容が一眺でき、環境的に適している。

パルチャモの東面は大きなバンド状のプラトーと岩壁帯がショーケーキのような横縞模様を見せているが、登頂ルートは、右の鞍部テシラブチャ峠より稜線を巡るのが最もポピュラーであり現在の所唯一の登頂ルートとなっている。

BCより登頂

我々はBCとしてテンポの部落上の4,600mの草原に天幕を張った。背後を露岩に囲まれた所で少し離れた所から総数7張の天幕も、とりまく環境に比べれば、いかにも寒々しくボツンとした感じを受ける程だっ広く特に対岸の一連のバットレス群がさらに荒涼さを募らせている。

BCからはテングラギタウの南面直下に沿って付けられた小径を1時間程で巨大な岩峰の直下に出る。ここよりサイドモレーンの登りとなり複雑なモレーン内につけられた登路を見失わないよう忠実に辿り最後の急登を終えると岩小屋のある台地に出る。ここにC1を設営する。

このC1を基点としてコンディションの良好の人はさらにC2設営予定のテシラブチャ峠に向い又高度順応の遅れている人はBC～C1間を往復して高度への適応をはかるように努める。いくら期間が限られた短い日程とは言え、上部前進キャンプでの高山病の支障は、結果的には、登頂の可能性を決定的に無にする度合いが高い為、少しでも低い地点で万全の順応をはかって体調を整えた方が良い。特にBCが4,600mある為、重症の場合はターメの部落まで一度下る必要も出てくる。

C1はテングラギタウから派生する氷河の末端の直ぐ近くで時々自然の侵食と融解によって、けたたましい轟音を伴った落石やセラックの崩壊があるが、この台地は1本大きなルンゼを隔てたモレーン上にあり全く危険はない。BCからテシラブチャ峠との高度差約1,000mを考えるとどうしても中間キャンプは必要でありさらに氷河上での湿気を気にしながら寝る不快さを考慮するとこのC1に当たる台地は最適地であると言える。

C1よりアシラブチャ峠

へは100m程の岩稜から所々ヒドンクレバスが走っている拡大な氷原の右側を登る。バルチャモの東面のスラブが眼前に迫り、又振り返れば先々日辿ってきたターメコーラが湖のような静寂さをもって横たわっている。

ゆるやかな登りの氷河を登り終え、顕著なクローワール右のガレ場を詰めて、細く窪んだクローワールに入る。ここはラビーネンツーク(雪崩の道)が走っているのを見ても決して安全とは言えないがテシラブチャ峠に抜ける唯一無二の弱点である為、素早く通り抜けた方が賢明である。

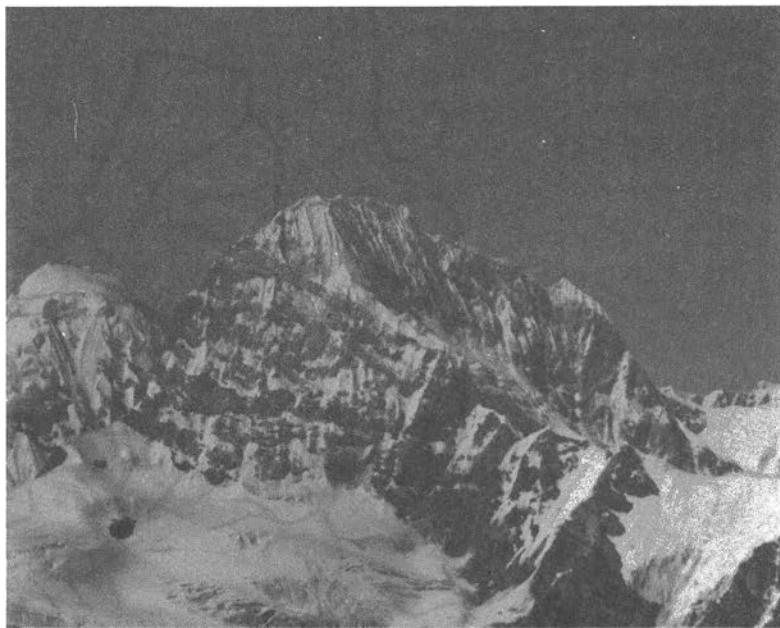
約60mでクローワールを登り終えると前方にテングラギタウの大スラブが覆い被さるように迫って来る。テシラブチャ峠はもう目と鼻の先である。

テシラブチャ峠は拡大なスノーコルで我々は、ターメコーラ側の雪原にC2をかまえたが、テングラギタウ側に3～4張天幕の張れるスペースの岩小屋もある。

ここからバルチャモのその女性的な北斜面が手に取るように見渡せ、頂上までの高差527m、時間にして往路2時間～3時間の行程である。

C2から頂上へのルートは、まず広い雪面を右斜めにその円錐型の山容を右に廻り込むように登ると次第に傾斜が急になってきてセラック帯にぶ

頂上から Takargo を望む



つかる。年によって変化は当然考えられるが、我々の時は、そこより今後は左斜めに部分的に急な雪壁の弱点を選んで上部の雪面に出る。頂上は直ぐそこである。

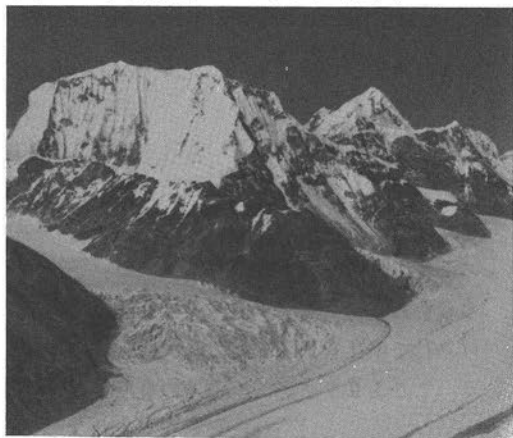
我々が登った1979年5月は天気も良く初期の段階で無理せず執拗なまでに順応を繰り返したおかげで全員元気に頂上を踏むことが出来た。頂上からは、雪煙を上げるエベレスト、直下のトラムバウ氷河上に目白押しに並んだロールワリン中央部のアイス・キャップを纏った山稜、その彼方には、羽ばたくように大きなガウリサンカール、メルンツェの眺望が素晴らしかった。

後 記

翌年2月このバルチャモの頂上直下の斜面で日本人パーティが遭難するという事故が発生した。私も再び同年3月に訪れたが特記すべき点に直下の左斜上する部分が険悪なセラック帯と化していた。今だにルートは、この部分を通らざるを得なくなっているが、足元には崩壊したセラックの生々しい残骸がありこの通過には細心の注意が必要である。

セラックの崩壊は、発達状況と時間帯その位置する面、高度によって千差万別ではあるが、判断を決定付けるのは、崩壊を直視でもしない限りだいたいの場合、二次的な理由としかならず軽視

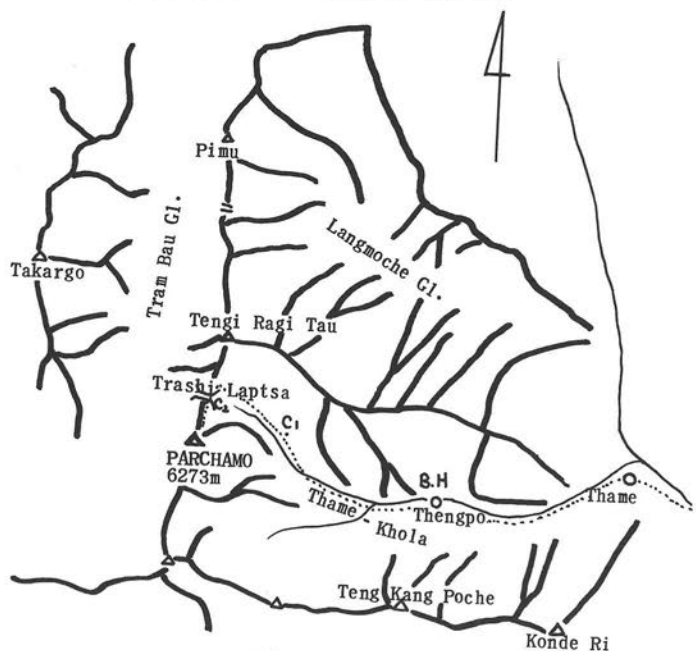
トラムバウ氷河とロールワリンの山々



しがちである。同じ氷河発達が発山に与える危険としてヒドンクレパスを例にとるとアンザイレンである線までは回避できるが、セラック崩壊は、致死率の高いものであるということを認識されたい。

同時に僅か1年でこうも悪化したセラック帯を見るに及んで、バルチャモのみならず氷河を形成する総ての山に言えることかもしれないが、特にこういった「トレッキングパーミットで登れる18座」を初めとする情報の豊富な、しかも実際多くのパーティが登頂している山の場合は、応々に過去の記録のみに依存して邦内の山のコースガイドのように全面的に信じることは、当然のことながら危険だと感じた。

バルチャモ概念図



H A J ・ 昭和56年度 7 月以降行事予定

本年度の事業計画にもとづき各種事業の日程を
下記のとおり予定しました。会員の皆様のご協力
をお願い致します。

* 7 月

- 11日(土) 理事会
- 15日(水) シャルマ氏来日
- 18日(土) ネパールヒマラヤ研究会(東京)
シャルマ氏歓迎会(東京)
- 19日(日) 第11回日本ヒマラヤ会議(京都)

* 8 月

- 5日(水) 高所登山懇談会(宇都宮)
- 22日(土) サリーン氏来日
- 23日(日) 第12回日本ヒマラヤ会議(仙台)

* 9 月

- 5日(土) カンチェンジュンガ報告会(東京)
- 19日(土) カンチェンジュンガ報告会(福島)

* 10 月

- 29日(木) 登山学校報告会

* 11 月

- 7日(土) 第13回日本ヒマラヤ会議(前橋)
- 14日(土) ヒマラヤ集会(広島)
- 15日(日) 第14回日本ヒマラヤ会議(福岡)
- 26日(木) ブリグティ(ムスタン)報告会(東京)

* 12 月

- 5日(土) 第15回日本ヒマラヤ会議(高知)
- 7日(月) ヒマラヤ集会(長崎)
- 13日(日) インドヒマラヤ会議(東京)

* 1 月

- 9日(土) ヒマラヤ集会(名古屋)
- 17日(日) ランタン・リ報告会(長井)

* 2 月

- 21日(日) 第16回日本ヒマラヤ会議(札幌)

* 3 月

- 6日(土) ヒマラヤ集会(富山)



ヒマラヤ登山の専門家

SITA

並ぶものない山岳サービス

- ★ インド政府許可証
- ★ 通関手続
- ★ 交通機関
- ★ ポーター
- ★ ハイポーター
- ★ デラックス食料賄い
- ★ テント宿泊用具
- ★ マウンテンガイド

SITA WORLD TRAVEL (INDIA) PVT. LTD.

F-12, Connought Place, New Delhi-110001, India

CABLE: SITATUR PHONE: 45961 TELEX: 2823

日本代表

ファー イースト エンタープライゼス

東京都港区北青山3丁目6番18号 青山共同ビル ☎407-8100 (代表)

ベランのパノラマ―アルプスとヒマラヤの世界―

実業之日本社

1枚の写真がもたらす情報量はとてつもなく多く、かつ客観的である。目標とする山や地域の研究過程で、文献を余すところなくあたっても写真がないと画竜点睛を欠く。

いかに詳細を極めた記述でも文字による伝達は既に著者にとって選択された限定情報であり、主観的なものである。

写真にも欠点はある。写真からの情報読みとり量は経験の多少によって著しく異なってくる。人工衛星「ランドサット」がとらえたヒマラヤの写真がある。インド平原からヒマラヤを越えてチベット高原に続くとてつもなく広い地域を写している。けれどこれを直接的にながめても悲しいかな素人の私にはわづかな情報しか読みとれないのである。

一つの地域の概念、或いは山の全体像を得るには自分の目で直接高いところから見下ろすのがもっとも手早い。飛行機を利用した偵察は実に効果的である。実体写真も同様である。

「鳥瞰図」、あるいは「立体図」の有用さがここにある。それは既に加工され、省略化・限定化・アクセントの付与がなされており、全きあるがままの姿とは程遠い。

しかし、製作者が盛りこんだ情報のほとんどは見る者にも共有されてくる。

世界で最もすぐれたパノラマ画家といわれるベラン教授のパノラマは、見る者の理解を助けるための誇張を効果的、かつ自然とも思えるかたちでおりこんでいる。絵画的な美しさと品格は他に例を見ない。自然の荘大の中に神の演出をさえ思わせる手法はひたすら見る者の目を奮う。

ヨーロッパ・アルプスの地理・地形は、麓の人文をもとり入れて正にたなごころの中に見る思いがする。アルプスの箱庭の美しさが実感させられる。

ヒマラヤが3葉にしかすぎないのはまことに残



念であるが、「ネパール・チベット」、「ヒマラヤ山脈」の2葉によって巨視的概念をよくつかむことができる。

「エヴェレスト」の描写も正確であり、ルートを把むのに役立つ。

できれば、大ヒマラヤ全域の主要山域に関してエヴェレストなみのパノラマがあればどんなに有用なことか。

「太平洋海底地形」と「インド洋海底地形」のパノラマにより大洋の雄大さを別な視点から認識させられる。

ベランが高く評価されたのは海底地形のパノラマによってであるだけに尽きせぬ興味をそえられる。

パノラマには適切な解切がつき、また、スケッチが入っている。

画家であるだけにその1枚々々が感動的である。創世紀の世界を見るような独特の描写は自然の奥深さを一層きわ立たせる。

付録に大判のパノラマが付いているが、これは格好のインテリアとして書斎をかざるのにふさわしい。

ぜいたくとも思える一本であるが、見開いて心ゆたかなひとときを過すにはまことに得難いものである。

ヨーロッパ文明の一つの精華といえるものだろう。

(H A J専務理事 稲田定重)

55年12月 実業之日本社発行 箱入 26cm×36cm 120ページ 付録(大判パノラマ三葉) 23,000円。

新入会員

昭和56年1月10日～4月14日

会員番号	氏名	〒	住	所	電話番号
1486	竹原 夏美				
1487	川名 正一				
1488	石川 昌				
1489	河原 文武				
1490	尾形 芳秀				
1491	三好喜代美				
1492	小泉 俊夫				
1493	名塚 秀二				
1494	松島 宗一				
1495	湯沢 好夫				
1496	西川 隆				
1497	長 繁夫				
1498	荒川 市郎				
1499	福田 義幸				
1500	遠峰 富子				
1501	細貝 登				
1502	金子 一実				
1503	近藤 和美				
1504	伊藤 定夫				



UNITED TRAVEL SERVICE(P)Ltd.

■インドヒマラヤ全域のアレンジをすべて日本語でひきうけています。本社にも東京事務所にも日本語に堪能なスタッフが多勢おります。

■許可取得から通関、隊荷輸送、ポーターアレン

ジまで、遠征・トレッキングのすべてを取り扱っております。

■詳細は東京事務所のサニーまでお問合せ下さい。もちろん日本語で!!

東京事務所 〒141 東京都品川区西五反田2-23-11-20 電話 03-493-4920

本社(デリー) 802 Nirmal Tower, 26 Barakhamba Road, New Delhi India

Phone: 46107, 42804, 43984, Telex: ND3174 Cable: YOKOSO

寸 感

➤6月6日酷暑のカトマンズから戻りました。留守をお願いした緑川、細貝両氏の献身的な働らきのおかげで事務局も段々と形が整ってきました。ありがとうございました。

➤カンチェンジュンガBCには多くの会員の皆様から激ましのお便りをいただきました。隊員一同に代わり厚くお礼申し上げます。

➤特集はカンチェンジュンガを組みました。報告書や雑誌に発表しない細部を中心にまとめてみました。

➤7月にはネパールからシャルマ氏、8月にはインドからサリーン氏を迎え、ポストモンスーンにはインドで登山学校、ネパールでは、ランタン・リとブリグティの2つの登山。その合間を縫って各地で開らくヒマラヤ会議や集会。と今年も身も心も休まることのない日々が続きます。

➤郵便料金の大幅な値上りで会の財務も打撃を蒙り頭を痛めております。会議その他の連絡費もバカになりません。
(山森・記)

事務局日誌 (6月)

3日(水) カンチェンジュンガ隊八木原他3名帰国

5日(金) 稲田専務理事帰国

13日(土) 第10回(秋田)日本ヒマラヤ会議開催

16日(火) シャルマ氏・サリーン氏の件並びに本年

度行事日程について打合わせ(稲田・山森)

25日(木) 事務局打合わせ(東京)

26日(金) 文部省と法人化の件協議(稲田・山森)

ヒマラヤNo.117 (8月号)

昭和56年7月10日印刷 56年8月1日発行

発行人 柴田 金之助

編集人 山森 欣一

発行所 日本ヒマラヤ協会

〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1

淀橋食糧ビル506号

Shikhar Travels

—— シカール・トラベル ——

“魅惑の インド・ヒマラヤ”

シッキム・ブータン・ガールワール・クマオン
クル・マナリ・ラダック・ネパール……
へのトレッキングや登山を計画されている日本の皆さん!

当、シカール・トラベルは、通関・隊荷輸送からガイド、
ポーター、ポニーのアレンジなどすべてのご用命を承ります。



Shikhar

TRAVELS PRIVATE LIMITED

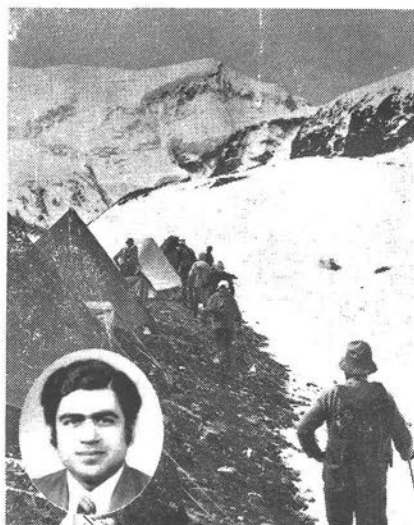
1,701, Nirmal towers,

26 barakhamba road new delhi-110001

tel. 42555, 42666 telex 031-4364 SHIK IN Cable SHIKHE

Branch office: Gangtok

Camp office: Joshimath & Uttarkashi



CAPT SWADESH KUMAR
(MANAGING DIRECTOR)

ヒマラヤへの装備



◎遠征隊の装備、相談にのります。



ICI 石井スポーツ

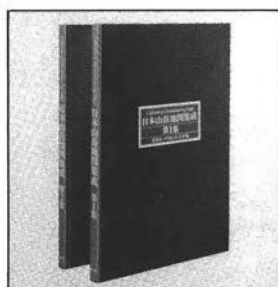


- 新宿登山本店 / 〒160東京都新宿区百人町 2-2-3 ☎03 (208) 6601(代)
- 新宿西口店 / 〒160東京都新宿区西新宿 1-16-7 ☎03 (346) 0301
- 水道橋ハードギアショップ / 〒101東京都千代田区三崎町 2-8-14 ☎03 (264) 5575
- 水道橋ソフトウェアショップ / 〒101東京都千代田区三崎町 2-8-6 ☎03 (264) 8901
- 大宮店 / 〒330埼玉県大宮市宮町 2-123 ☎0486 () 5707
- 高崎店 / 〒370群馬県高崎市新町105 ☎0273 (27) 2397
- ICI通販部 / 〒160東京都新宿区大久保 2-19-10東和ビル内 ☎03 (200) 7219

学研の山岳地図集成シリーズ

全国の主要山岳を網羅。山岳関係者の基本図書。

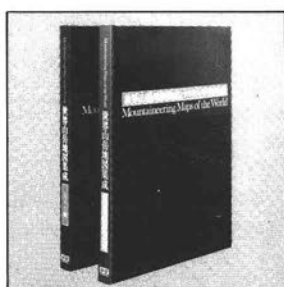
日本山岳地図集成 全2集



■編・著 吉沢一郎ほか
主要山岳を中心に図取りした、いままでにない本格山岳地図集。全国の一、五〇〇メートル以上の山岳を網羅し、山名、沢名、ルート名をはじめ、山小屋やキャンプ地、水場などの登山情報を豊富に収録した。

●第1集 総頁200頁
収録地図54図 解説99頁
●第2集 総頁190頁
収録地図40図 解説78頁
●B4判(364×257ミリ)
上製本/箱入り
全2集セット現金価格(定価)
28,000円
(分割払もあります)

世界山岳地図集成 全2集



■監修 吉沢一郎
世界の登山家の夢であるヒマラヤ・カラコルム連峰が全地域大縮尺で集大成されたのは世界でも初めてである。美しいレリーフ4色地図とカラー写真、ルート解説など最新の情報が山岳愛好家だけでなく広く興味をそそる。

■カラコルム・ヒンズブークシュ編
●編・著 高木泰夫/宮森常雄
●B4判/上製本/総頁350頁
/カラー32頁
●編・著 吉沢一郎ほか
●B4判/上製本/総頁328頁
/カラー32頁
全2集セット現金価格(定価)
40,000円
(分割払もあります)

残雪が描く「山の芸術」の豪華山岳写真集。

山の紋章 田淵行男 雪形

●6月下旬 新発売
■名著「日本アルプスの蝶」につぐ不朽の書。雄大なカメラワークと感情溢れる名文で綴った山行50年の総決算。
●造本・体裁
●A4判 総頁332頁(4色108頁・1色52頁・解説152頁・その他10頁) ●収録写真カラー115点モノクロ93点
●定価 18,000円

田淵行男 日本アルプスの蝶

日本アルプスの雄大な自然に息づく9種の高山蝶の生活史を克明に描く。山岳写真家 田淵行男氏が34年の歳月と尽きせぬ情熱を込めたライフワークの集大成。
●造本・体裁
●A4変型判 総頁466頁(カラー1216頁モノクロ136頁・解説174頁) ●収録写真(カラー約400点・モノクロ約200点)
●定価 25,000円

発行 学研 学習研究社

●内容見本ご希望の方は下記宛て請求ください。
(株)学研美術販売
〒145 東京都大田区上池台4-40-5 ☎東京(03)720-1111代